

.....

書 評

.....

Norman Kretzmann, Anthony Kenny & Jan Pinborg (ed.) :
The Cambridge History of Later Medieval Philosophy

Cambridge University Press 1982, xiv+1035 p.

清水哲郎

‘From the Rediscovery of Aristotle to the Disintegration of Scholasticism 1100-1600’
 という副題の付いた本書はケンブリッジ大学出版による哲学史シリーズの一つとして企画されたものであり、Guthrie の *History of Greek Philosophy*, A. H. Armstrong 編の *The Cambridge History of Later Greek and Early Medieval Philosophy* に続く位置を占めている。これらはそれぞれが独立の企画であるが、Guthrie が新プラトン主義を落しているのに対し、Armstrong は時代的には前者と重なる部分を含み、これを補完するように前5世紀から12世紀初頭、言い替えれば古アカデミア派からアンセルムスに到るプラトンの伝統に焦点を絞っている、といった関係はある。本書は年代的には Armstrong 編の上記書が扱った初期中世哲学に続く時期（この意味で early に対し later なのである）、すなわち1100年以降、言い替えればアンセルムス以降ないしアベラールからを主として扱う。しかしながら前者のプラトンの伝統への集中に対し、本書はラテン中世におけるアリストテレス的伝統に焦点を絞るものであり、その限りでは年代的に1100年以前に遡る部分も含んでいる。

41人の寄稿者による46の論文から成る本書は、次に掲げる目次からも直ちに分るように、通常の中世哲学史の記述方式とは異り、通史的構成をとっていない。また、

題材の選択もこれまで我々が親しんできた中世哲学史に比べて大部異なる観がある。その内容は次のような11部からなっている。

- I. 中世の哲学的文献（どのような仕方で行われ、そこからどのような著作形式の文献が生れたか）
- II. ラテン中世へのアリストテレスの導入（翻訳及び注釈）
- III. 古論理学（アリストテレスの著作としては『カテゴリー論』『命題論』のみに依拠するもの）
- IV. 中世盛期における論理学——意味論
- V. 中世盛期における論理学——命題及び様相
- VI. 形而上学と認識論
- VII. 自然哲学
- VIII. 心と行為の哲学
- IX. 倫理学
- X. 政治学
- XI. スコラ哲学の挫折、無視そして再興

このような題材の選択及び構成の仕方に、本書の最大の特徴、すなわち編者達の中世哲学史に向かう態度と、それに由来する本書を企図するに際しての意図が現われている。問題史的な構成をとった理由の一つは、中世哲学の歴史研究としては個々の哲学者が如何なる教説を持っていたかということよりも、或る哲学的問題がどのように論じ合われ展開していったかということに向かう方が適當である、との考えにある。だが、より重要なことは、かかる構成によって中世哲学が単に歴史的興味の対象としてではなく、我々自身の哲学の問題と問題を共にするものとして、読者の前に立ち現われてくるという点にある。このことこそが編者達の意図にとって肝要なのである。

題材の選択に関しては「中世哲学に関する定評ある文献において無視されてきた」テーマ、そして「最近の研究が最も進展をみせてきた」テーマに重点を置いたという。上記内容目次から見るとれるように、論理学関係に余りにも多くの紙面が割かれ（III, IV, Vのみならず、VI, VII, XIもその主要部分は論理学に関っている）、逆に自然神学などは無視されているといったアンバランスは、このような理由

によるのである。ところで、「最近の研究において最も進展をみせた」分野とは現代の中世研究者が関心を集中させた分野であって、それは現代の哲学的関心の傾向を反映したものに他ならない。従って、かかるテーマこそは現代の哲学者に最も認められ易いものであろうとも考えられている。

このような構成、このような題材の選択は中世哲学研究が現代における哲学（特に分析的な哲学の流れが念頭に置かれている）と結びつくという結果を生むであろうこと、それこそは編者達が積極的に望むことである。すなわち編者達は「中世哲学が哲学的ゲッターの中で研究されて来た時代を終らせる」ことを目指している。その時代とは「優れた中世哲学研究者の多くは二十世紀における哲学上の発展に親しまず、共感をもたず」にあり、他方「現代哲学の仕事の大方は同じ問題に関する中世の成果を全く知らずに遂行された」時代のことである。これに対して「現代哲学の活動を中世哲学と知的に連続的にすること」、そして「現代における哲学研究と中世哲学研究とが相互に益し合う関係」となることが目指されている。

編者達も指摘しているように「既に現代哲学は古代哲学とは連続的となっており」、現代において哲学することと古代哲学を哲学的に研究することとは相互に論じ合い益し合う関係を持つようになってきている。それを中世哲学にも広げようというのである。本書の編者達及び寄稿者達のこれまでの仕事がそもそも（私の知る限りではあるが）かかる方向を目指した実践となっている。従って本書は中世哲学研究の先端部分の現在における哲学的研究への態度と、達し得ている水準を示し、これからの研究の方向付けをするものとして、記念碑的意義を持ち得ると思われる。今やこのような傾向が（まさに古代哲学における実践を範としつつ）中世哲学研究において芽生えつつある日本の学界に対しても本書は有益なものとなるに違いない。

ところで、中世哲学研究が現代の哲学と結びつくとはどういうことだろうか。それは、現代哲学が行っている議論は既に中世において云々の形で為されているといったこと、或いは、現代哲学の枠組みを当て嵌めれば中世のこの議論は云々の型になるといったことを述べて終ることであると考えてはならないだろう。こういったことは研究の過程においては触れられる事もあろうが、それはあくまでも哲学途上における一つの事に過ぎないのであって、これだけでは真に現代と中世の哲学が結びついたことにはならない。真に両者が結びつくとは、中世哲学を研究する者が単

なる歴史研究としてではなく、同時に哲学の問題（それは単に中世哲学研究者のみではなく、およそ哲学をしようとする全ての者が共にする問題のはずである）への接近としてその研究を行い、そのようにしてその問題自体をめぐって交される我々と同時代の哲学者集団における討論に参加することにおいて成就することなのではないか。つまり我々に今要求されていることは、中世哲学を現代哲学の枠内に解消することでも、現代哲学を中世哲学に引き寄せることでもなく、まさしく中世の哲学者のこゝばに対峙し、これと対話をすることであり、そこにおいて我々のこゝば（それは二十世紀において哲学をする者に共通の言語で語られるはずだ）を語ることに他ならない。

この点から本書において編者の意図がどれほど実現されているかについて私見を述べれば、中世哲学研究の現状は（その先端部分においても）未だ過渡期にあることが本書にも表われているのではないか。もちろん本書は（既述のようなアンバランスがあるとはいえ）中世哲学史全体を広く扱い、研究が現在到達している所を陳列して見せるものである為の制約があることは考えなければならぬだろう。それにしても、論文によっては時として、研究者が中世哲学に向かう際に携える分析の道具（現代の論理学ないし哲学から持ち出された前提）が気になることがあった。その道具に頼るあまり、テキストと真剣に対峙し、これを解釈しようとする分析の刃さばきが鈍っていると感じられることもあった。もちろん、すべての論文がそうだというわけではないし、こういった気になる所のある論文も中世哲学に関する優れた新知見ないしこれまでの個別研究による新知見の総括という点では大いに評価すべきものであると思う。

以下では、三人の主たる編者の内二人までが論文を寄せている第Ⅳ部に限って、もう少し立ち入った紹介をし、本書全体の傾向を把む手掛りとしたい。

第Ⅳ部の初め、第7章では *Logica Modernorum* (1962-7) をはじめ数々の中世論理学関係文献の校訂と研究で知られる、この方面の第一人者 L. M. De Rijk が「名辞の諸特性に関する理論の起源」を論じる。De Rijk は、個々の名辞が単独で帯び、その本質を形成するものとされる *significatio*（表示作用）についての教説と、名辞が単独にではなく文章の中で現実に持つ意味を探る理論（contextual approach と称される）を対比し、後者が中世意味論の発展に積極的に働いたことを提示

すべく、12世紀後半～13世紀前半における *appellatio* 及びその発展としての *suppositio* 理論を分析する。これは多くの基礎研究の上に立つ De Rijk ならではの提示となっている。ただ私の見る所では、*significatio* という考えが根絶されずに後々まで残ったことを中世論理学にとってマイナスだったと評価する点については納得できない所が残る。この論文においては確かに *significatio* が根強かったことはよく示されているが、果して本当にマイナスに働いたかどうかについては明確ではなく、むしろ何らかの現代哲学・論理学に由る前提に立ってこう評価しているのではないかという点が気になるのである。

第8章では Alain de Libera が12世紀後半～13世紀中項（強調点は前章、De Rijk のそれより後の時期にある）における「論理学に関するオックスフォード学派とパリ学派の伝統」について論じ、両者は決して独立の流れをなしていたわけではなくその時々で影響関係があったとはいえ、両者間には或る相違が確かに存在したこと、その相違ないし対立には1250年頃を境にして性格に変化が生じていることを示す。*appellatio* ないし *suppositio* 理論における *ampliatio* (拡張) と *restrictio* (制限) に関する議論の展開が考察の中心をなし、後半では特に Roger Bacon が取り上げられている。基礎づけられた、興味深い研究だと思う。

第9章、P. V. Spade 「名辞の意味論」は、以上の二論文が12, 13世紀に焦点をあてていたのに対し、14世紀を中心として論じていると言える。しかし歴史的というよりは、より理論的概説といった感じが強い。従って非専門家には分り易いかも知れないが、反面、テキストとの間に距離が生じてしまっている点があるのではないだろうか。後半は Spade らしいまとまりを見せており、それなりに読める。しかし、中世論理学における一般的なこととして「何かを表示すること (to signify) は、その何かについての理解を成立させること (to establish an understanding) である」を確定的なこととして前提とし、さらにこれに伴って Spade 自身の「言語は社会的コミュニケーションの為のもの、他人に話者ないし書き手の考えを理解させるためのものである」といった前提を導入し、これによってテキストを割り切ろうとしているとの感を禁じ得ない。to signify は to establish an understanding だということは確かに或る意味で共通の見解とも言えようが、さらにそれを個々の哲学者がどう解していたかを検討するならば、例えばここで為されているようなオッカムについて

の割り切った解釈は拒けられることになるのではなかろうか。

第9章が名辞の意味論であったのに対し、第10章は G. Nuchelmans による「命題の意味論」である。これは問題自身の構造を踏まえつつ、歴史的展開を適当にまとめて、分り易い論となっている。

第11章「共義語・詭弁的命題・解明を要することば」(これは目次および本文の題ではなく、各ページの頭に記されている題名に従っている)は、本書の編者の代表格と目される Kretzmann が執筆しており、共義語 (*syncategoremata*, つまり接続詞, 副詞, 前置詞のように、単独では命題の主語ないし述語になれない語のことであるが、論理学では *omnis* といった語もこれに含めて考えられる)に関する理論の研究となっている。力点は題名が示すように、共義語を含む詭弁的命題 (*sophismata*, 例えば *Socrates bis uidet omnem hominem praeter Plato*) がどのように論じられてきたかを分析することに置かれ、更には解明を要する命題 (*exponible propositions*) における共義語の理論の役割にまで言及している。テキストへの真剣な取組みは本書が目指す所を Kretzmann 自ら実践してみせたものといえるだろう。

第12章, Spade による「解不能なもの」(*insolubilia*, 主として「私は嘘を言っている」という類のパラドクス)は、この問題に関する Spade 自身の年来の研究成果の上に立つ総括的小論であり、説得的である。

第13章は、編者の一人である Pinborg による「純理論的文法」(*speculative Grammar*)。これは、13世紀後半に起った「様態論的」(*modistic*)文法——*modus significandi* という視点から理論構成をするもの——の研究である。様態論者 (*modistae*) の論理学・文法学の研究に関する研究業績が知られる Pinborg ならではの説得力ある論文であり、前記7章, 8章で触れられている様態論者への言及と合せ読むと、より興味深いであろう。

最後に一言付記するならば、本書の最後にある中世哲学関係文献表等は研究上非常に便利なものとなっている。